TOKYO MAIL NEWS
輸送サービス労組 東京地本
JTSU-E TOKYO
2022.4.28
No.291

知床遊覧船事故から考える「いのち」を預かるということ

4月23日、北海道知床半島にて、乗員・乗客26名を乗せた観光遊覧船が消息を絶ちました。11名が亡くなり、未だ15名が行方不明という、たいへん痛ましい事故となってしまいました。亡くなられた方、ご遺族に心よりお悔やみ申し上げるとともに、行方不明となられている方が一刻も早く救助されることを願います。

事故原因などの詳細は今後の調査が待たれるところですが、すでに報道されている内容から察するに、あまりに杜撰な安全管理体制が背景にあったということは指摘せざるを得ません。

業態は異なりますが、私たち鉄道従事者も、お客さまの「いのち」をお預かりしているのは言うまでもありません。4月25日には、運転士とお客さま計107名が亡くなった福知山線脱線事故から17年を迎え、それぞれの職場における安全議論も高まっています。

なぜ痛ましい事故が繰り返されてしまうのか。私たちには、悲惨な事故と真摯に向き合い、考える責務があります。

―指摘されている問題点―

✓ 経営者が現場を知らない

社長の記者会見のやりとりを見ても、常日頃から現場を把握していたとは思えず、事故に対する当事者意識も感じられない。

✓ 乗員の著しい経験不足

船長と甲板員の乗員２名は、現場海域での航行経験が非常に浅く、現場の特情などをほとんど理解していなかったとされている。

✓ 安全軽視の経営姿勢

船体に傷があったことや、無線アンテナの故障がありながらも放置していたことが報じられている。また「条件付き運航」として、海が危険な状態になれば引き返すという、乗客を危険にさらす運航管理が常態化していた。国土交通省は「条件付き運航という考え方はない」と、明確に否定している。

惨事を繰り返さないために何が大切なのか？
利用者として、そして輸送業務に従事する者として
いま一度、向き合って考えてみませんか？